

## 低出生体重児の母親の原動力

～ 保育器収容期間の母親の思いに焦点をあてて ～

西病棟5階 ○加藤綾子 大澤みゆき 塩崎ゆかり  
小川外志江 古田ひろみ

Key word : 低出生体重児 母親 思い  
はじめに

近年、周産期医療の進歩により低出生体重児の生存数は急激に増加してきている<sup>1)</sup>。

低出生体重児を出産した母親は十分な心の準備がなされないまま出産にいたっており、心理的にほとんどの母親が悲嘆にくれる<sup>2)</sup>と報告されている。特に、保育器収容期間の母親は深く傷つき、罪責感と将来の不安に打ちのめされ、危機的状態に陥っている<sup>3)4)</sup>とされている。しかし、母親たちはいつしかこのような状況から脱し、新しい環境に適応していくように見える。その母親たちの姿から、前述した悲嘆の感情が強い状況の中でも、少なからず肯定的な思いへの変化があり、辛くても面会に来るなどの積極的な行動へと向かわせる力(原動力)となるものがあるのではないかと考えた。先行研究では低出生体重児の母親の心理としてショック・否認・怒り・適応・再起の心理過程に沿った研究<sup>4)5)</sup>は多くされているが、保育器収容期間に着目した母親の肯定的な心理に焦点を当てた研究報告は少ない。

そこで今回、低出生体重児を持つ母親の、保育器収容期間における原動力となるものを探り、母親の原動力を引き出すことのできる看護支援のあり方を探る手がかりとしたいと考え本研究に取り組んだ。

用語の定義:原動力とは、危機的な状況下にある母親が、肯定的な思いを持つことや、積極的な行動をとることへと向かわせる力とする。

### I. 目的

1. 低出生体重児の母親の原動力を明らかにする。
2. 低出生体重児の母親の原動力を引き出す看護支援のあり方を探る。

### II. 研究方法

#### 1. 研究対象

児に先天異常や重篤な疾患がなく、出生直後から保育器に収容された低出生体重児を持つ初産の母親。

#### 2. 調査方法

研究者の観察や面接の技能を高め、視点のバイアスを最小限にすることやデータの解釈方法の検討を目的にプ

レテストを1例行い、インタビューガイドを作成した。面接は研究の趣旨を説明し、母親の理解が得られ、児の外来通院時期の平成17年8月に、当病棟面談室にて個別に半構成的面接を30分から1時間程度実施した。インタビューガイドにて、妊娠期の思い、初めて児と面会したときの思い、2回目以降の面会での思い、母親が退院後、児と離れてからの思い、そのような思いや状況の中で頑張ろうと思えたこと、支えとなったものを自由な語りからデータ収集した。面接内容は許可を得て録音して逐語録を作成した。

#### 3. 分析方法

逐語録から母親の思いが肯定的表現に変化があった部分に焦点を当て内容分析した。妥当性に関して、質的研究経験者からスーパーバイズを受けた。

#### 4. 倫理的配慮

研究対象者に依頼書を用いて研究の趣旨を説明し、承諾と同意を得た。同時に回答の拒否や面接の中止、及び内容の削除を行えること、また、その場合でも母児ともに不利益を被らないこと、及び、研究結果は研究以外の目的で使用せず、個人が特定されないよう処理し、個人の秘密を厳守することを伝えた。

## III. 結果

### 1. 対象の背景

対象者は、初産婦、自然妊娠、単胎出産した3名。児は出生時体重1326gから1764g、出生時週数32週6日から35週1日であった。面接時は児の退院後1ヶ月から4ヶ月経過していた。母親の入院日数は10日間から16日間、児の保育器収容期間は2週間から4週間だった。

### 2. 低出生体重児の母親の原動力(図1)

低出生体重児を持つ母親の肯定的表現の語りから13のサブカテゴリーと4つのカテゴリーが抽出された。(表1参照)以後、母親の原動力に関するカテゴリーを【 】、サブカテゴリーを『 』、主な語りを「 」で示す。

【わが子としての実感】では「飲む量が増えてうれしかった」「点滴、モニターが外れどんどん普通と同じことができるのでうれしい」「日々の写真を見て大きくなっているのが分かってうれしかった」など母親は『児の順調な成長』に喜びを示し、「他の子に比べ体重があったから大丈夫だと思えた」「重症疾患がなく、元気な状態を見てうれ

しいと感じることができた」など『児の安定した状態』に安心感を得て、「手を触れたり、抱っこできたことがうれしい」「カンガルーケアできたことがうれしい」など『児とのふれ合い』を持つことでうれしい、かわいいなど児への愛着を示していた。また、「小さいけどそれはその子なりなんだと思うと受け入れられ楽になった」「児に個性があることを知り、ほんの些細なことでも幸せに思え頑張ることができた」と『児の個別性の発見』をすることで、児を受け入れることができていた。

【夫の肯定的な関わり】では「夫による言葉の励ましがあった」「お互い話さなくても気持ちが通じ合っていた」と『夫の信頼関係』を表す言動があり、「夫も児の誕生を喜んでいて」「子どもを見る夫の目が嬉しそうだった」と『夫の児の受け入れ』に喜びと安心感を得ていた。また、夫は「元気な児をみてよかった」「100点だったよ」と『夫の肯定的な出産への理解』を示していた。

【スタッフの献身的な関わり】は「先生から医学的な治療内容や今後の方針を詳細に説明してもらって安心した」「看護師さんがモニターやアラームについて説明してくれて、現在の状態が何もないことがわかり安心した」など『医師・看護師からの説明や情報提供』を受ける事で安心感を得ており、「看護師に話す事で気持ちがすっきりした」「悩みや不安など色々な思いを真剣に親身になって聞いてくれてありがたかった」と『看護師の傾聴』に対し感謝の気持ちが見られた。また、「わからないことがすぐに面会中に聞く事ができる」「何かあったらすぐに対応してくれ、何かあっても大丈夫と思えた」「看護師さんの言うことが一番の情報で信頼できる」など母親はスタッフを頼りにし、『スタッフとの信頼関係』を見出し、「1ヶ月かけていろいろ教えてもらえるので勉強ができた」と『育児参加への促し』を前向きに捉えていた。

【体験者との共感的な交流】は「他の母親とお互いに思いの表出ができ、気が楽になった」「同じ経験をしている人の経験談を聞き、思いがわかり納得できた」など体験者との『思いの共感』をすることで孤独感の軽減が図れ、「その児なりの経過を聞き、大丈夫だったとか、すぐ大きくなって保育器からでられたよと、他の入院時の母親から励まされることが心強かった」と『経験談』を肯定的に捉えていた。

#### IV. 考察

本研究により、低出生体重児の母親の原動力は児、夫、スタッフ、体験者の4者から得られていたことが明らかになった。低出生体重児の母親の原動力の特徴を考察し、原動力を引き出すための具体的な看護支援のあり方を検討した。

##### 1. 児から得られる原動力

母親は早産という予期せぬ体験により、児に対して罪責感

情を抱き、自責念が強くなる<sup>2)</sup>が、『児の順調な成長』や『児の安定した状態』を視覚的に見て、児が危機的状況から少しずつ脱し、正常児に近づきつつあることを自ら実感することで、児の現状を肯定的に受け止めていたと考えられる。

また、児の状態が落ち着き、タッチングからカンガルーケア、抱っこ、保育器収容中でも『児とのふれ合い』をもつことで児との距離が縮まり、一体感を実感したことから、母親の安心感や喜びにつながっていたと考えられる。

さらに、『児の個別性の発見』から、小さいことはわが子の個性として捉え、児を受け入れられるようになり、「ほんの些細なことでも幸せ」と語るように、肯定的に考えられるようになっていた。このことから、【わが子としての実感】することは母親が児を肯定的に受け入れるといった行動を引き起こす原動力となっていたと考えられる。

##### 2. 夫から得られる原動力

夫は母子の最も身近に存在<sup>3)</sup>しているが、『夫と信頼関係』があることは母親が支えられていることを実感でき、「二人で一緒にやっというと思った」という語りからも、危機的状況にある母親の精神的な安定につながっていたと考えられる。

また、『夫の児の受け入れ』や『夫の肯定的な出産への理解』から、母親自身が夫に受け入れられたことによって、この出産体験を肯定的に捉えられるようになり、安堵感を持つことができたと考えられる。永田らの研究では、母親と子どもとの関係性の発達に関わる要因の中で、夫婦関係の再構築が必要とする場合には母親は感情不安定の持続や不安が高いと述べており<sup>9)</sup>、今回の結果から、【夫の肯定的な関わり】は、母親の精神的な安定や不安の軽減をもたらし、母親と児との関係を発達していくためには欠かせない原動力となっていたと考えられる。

##### 3. 周囲の人間関係から得られる原動力

『医師・看護師の説明や情報提供』の語りから、「医師から児は何も異常がなく安心してよいという状態説明」や「看護師がモニターやアラームの説明をしてくれて、現在の児の状態に何もないこと」の説明によって母親は安心して、このことは『児の安定した状態』を母親が実感することへの助けとなっていたと考えられる。また、「哺乳量や体重増加量の変化などの説明が細かくありうれしかったし安心した」という語りからも、『児の順調な成長』を実感できることにつながっていたと考えられる。

「看護師に話すことで気持ちがすっきりした」とにかく聞いてくれてありがたかった」という語りから、母親は『看護師の傾聴』によって、そのままの自分を受け入れられていると感じていたと考えられる。また、「看護師さんの言うことが一番の情報で信頼できる」「聞ける場所があり安心した」の語りから、『スタッフとの信頼関係』が存在することで、スタッフに支えられ、見守られている実感を持つことができたと考えら

れる。このことから、母親は信頼あるスタッフに支えられ見守られている環境の中で、安心して『児とのふれ合い』や『育児参加』を行うことができたと考えられる。よって、母親にとって【スタッフの献身的な関わり】は、母親の精神的な安定をもたらし、児と積極的に関わることができる原動力となっていたと考えられる。

【体験者との共感的な交流】では、同じ母親としての立場から同じ思いを分かり合えたことで孤独感が減少し、今の自分の思いに納得ができ、少しずつ児の現状や自分の置かれている状況を受け入れていたと考えられる。さらに、『経験談』から、具体的な児の成長へのイメージが付き、児が正常に成長できることへの希望を持つことができ、児を肯定的に受け止められていたと考えられる。このことから、【体験者との共感的な交流】によって、母親は児を肯定的に捉えることができる原動力としていたと考えられる。

以上から、危機的な状況下にある母親にとって、夫、スタッフ、体験者の存在は、母親の精神面を支え、わが子として児を実感する原動力となっていた。また、母親が児をわが子として実感することは、肯定的に児を受け入れ、積極的に児と関わるといった行動を引き起こす原動力となっていた。このことから、母親にとって児の存在は大きなものであると言え、母親がわが子として児を実感できる関わりや、周囲の肯定的なサポートが受けられる環境調整などの看護支援の必要性が示唆された。

## V. 結論

1. 低出生体重児の母親は【わが子としての実感】【夫の肯定的な関わり】【スタッフの献身的な関わり】【体験者との共感的な交流】を原動力としていた。
2. 【わが子としての実感】は、児を肯定的に受け入れるといった行動を引き起こす原動力であり、それには『児の順調な成長』『児の安定した状態』『児とのふれ合い』『児の個性の発見』があった。
3. 【夫の肯定的な関わり】は、母親が児との関係を発達させていくことに欠かせない原動力であり、それには『夫との信頼関係』『夫の児の受け入れ』『夫の肯定的な出産への理解』があった。
4. 【スタッフの献身的な関わり】は、母親の精神的な安定をもたらし、児と積極的に関わることができる原動力であり、それには『医師・看護師からの説明や情報提供』『看護師の傾聴』『スタッフとの信頼関係』『育児参加への促し』があった。
5. 【体験者との共感的な交流】は、児を肯定的に捉えることができる原動力であり、それには、『思いの共感』『経験談』があった。
6. 母親の原動力を引き出す看護支援として、母親がわが子として児を実感できる関わりと、周囲の肯定的なサポートが受けられる環境調整の必要性が示唆された。

## VI. 本研究の限界

今回の研究では、対象者が3名と少なく、比較的母親ともに状態が安定した母親を対象としたため、低出生体重児の母親がもつ原動力をすべて分析したとは言い難く、研究者が医療スタッフであったため、母親が抱えていた思いをすべて表出できなかったと考えられる。また、今回の研究では4者の原動力の関係性までは見出すことはできなかったため、今回は原動力を探る段階までとし、今後は4者の原動力の関係性を見出していきたいと思う。

### 引用文献

- 1) 園田和孝: 超低出生体重児にかかわる疫学, 周産期医学, 31 巻 10号, p. 1273-1275, 2001.
- 2) Marshall H. Klaus, John H. Kennell, Phyllis H. Klaus: Bonding Building the Foundations of Secure Attachment and Independence, 竹内徹, 親と子のきづなはどうつくられるか, p. 159-205, 医学書院, 2001.
- 3) 橋本洋子: NICU ころのケア 家族のころによりそって, p. 78, p. 112, メディカ出版, 2003.
- 4) 近藤祐子: 低出生体重を出産した母親の心理状態の変化 児のNICU入院から退院に至るまで, 日本看護学会論文集34回小児看護, p. 115-117, 2004.
- 5) 永田雅子: NICU 入院児の母親への心理的アプローチ 極低出生体重児の母親の心理過程, 小児の精神と神経, 37 巻 3号, p. 197-202, 1997.

肯定的な思いを持つことができる  
積極的な行動をとることができる

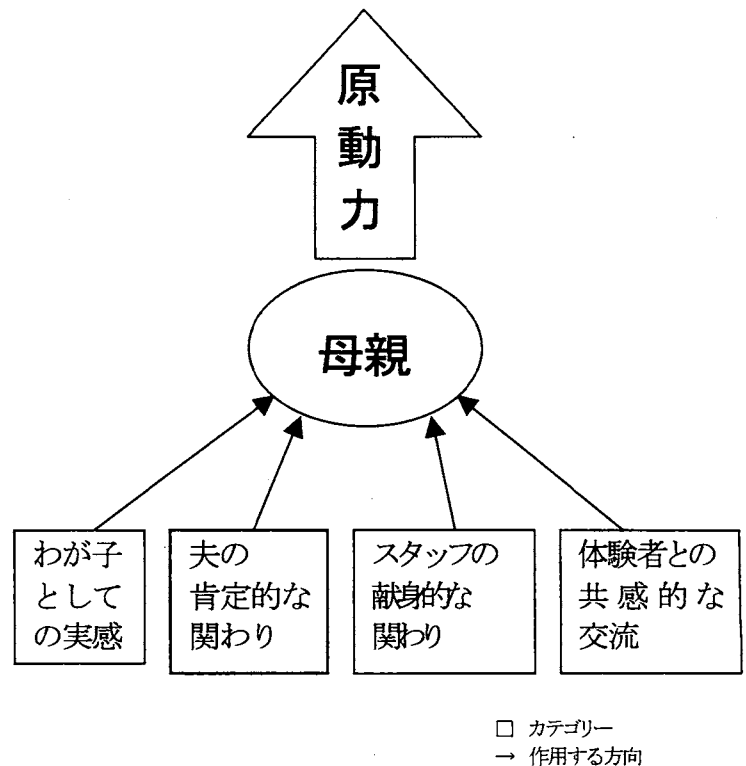


図1. 低出生体重児の母親の原動力

表1. 低出生体重児の母親の原動力に関するカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	語り
わが子としての実感	児の順調な成長	飲む量が増えてうれしかった 口から飲めるようになったり、体重が増えたり、会うのが楽しくなった 点滴、モニターが外れどンドン普通と同じことができるのでうれしい だんだん元気になっていることを感じることもできた 頑張って搾乳したものを児も頑張って飲んでいて頑張れた 日々の写真を見て大きくなっているのが分かってうれしかった 抱っこして、自分で授乳することができてうれしい
	児の安定した状態	他の子に比べ体重があったから大丈夫だと思えた 他の子たちもみんな元気だったから、うちの子も元気だと思えた 重症疾患がなく、元気な状態を見てうれしいと感じることができた
	児とのふれ合い	手を触れることや、抱っこができたことがうれしい カンガルーケアしてすごくうれしい 面会時に抱っこできることで、児をかわいいと思った 抱っこができると思うと面会に通うことができた 面会がゆっくりできたことがよかった
	児の個別性の発見	この子は小さいけど、それはこの子なりなんだと思うと受け入れられ楽になった 児に個性があることを知り、ほんのささいなことでも幸せに思え、頑張ることができた
夫の肯定的な関わり	夫との信頼関係	児を受け入れられないことに対して、夫による励ましや自分の不安を否定せずに聞いてくれ、二人で一緒にやっ払いこうと思えた 無事生まれた喜びはお互い話さなくても気持ちを通じ合っていた
	夫の児の受け入れ	児の誕生を喜んでいる姿がうれしかった 子どもを見る夫の目が嬉しそうだった
	夫の肯定的な出産への理解	元気な児をみてよかったって言ってくれ、100点だったよって言ってくれよかった 児は小さいけど、これでも生きていますと実感し、感動していた
スタッフの献身的な関わり	医師・看護師の説明や情報提供	医師から児は何も異常がなく安心してよいという状態説明や医学的な治療内容とその必要性、今後の治療方針などを詳細に説明してもらうことで安心できた 看護師がモニターやアラームの説明をしてくれ、現在の児の状態が何も無いことが分かり安心し、その環境に慣れていくことができた 面会の度に哺乳量や体重増加量の変化などの説明が細かくありうれしかったし安心できた 直接授乳が可能な時期、保育器から出られそうな時期の説明があり安心できた 児は母親を認識できていることを説明されることで児への関わり方を知った
	看護師の傾聴	看護師に話すことで気持ちがすっきりした 悩みや不安などいろいろな思いを真剣に親身になってとにかく聞いてくれてありがたかった 看護師さんに一番話を聞いてもらった
	スタッフとの信頼関係	責任を持って24時間見てもらえ、また甘えることができた 分からないことがすぐに面会中など聞くことができた 看護師さんの言うことが一番の情報で信頼できる 何かあったらすぐ対応してくれ、何かあっても大丈夫と思えた 電話かければすぐ答えてくれるという聞ける場所があり安心した
	育児参加への促し	(児に関して) 1ヶ月かけていろいろ教えてもらえるので、勉強ができた 育児経験者のスタッフから児に関して学べ、経験者なので信頼できた
体験者との共感的な交流	思いの共感	同じ低出生体重児を生んだ母親と話し、同じ思いをしていることを知った 同じ経験をしている人の経験談を聞き、思いが分かり、納得できた 満期で生んだ母親も、話をする中で児に関して心配していることはみな一緒だということが分かり、満期産の母親を受け入れることができた 他の母親とお互いに思いの表出ができ、気が楽になった
	経験談	経験談で、その児なりの経過を聞き、大丈夫だったとかすぐ大きくなって保育器からでられたよと、他の入院児の母親から励まされるのが心強かった